

高橋康之

×

田中佑加

埼玉医科大学総合医療センター  
血液内科

今号の「未来を担う若者たち」で紹介するのは、大学は違えど卒業が同期で、現在は同じ医局に勤務する二人である。片や小児科医を目指して医師になり、血液内科の魅力に惹かれた医師、こなた研究者を目指して医師になり、これまで主に臨床現場に立ってきた医師。これまでの道りと将来の夢を語ってもらった。（聞き手は「Hematopaseo」編集部）

## 実臨床も研究も血液学には奥深さあり 患者さんと共に取り組む治療が魅力

——お二人は、大学卒業が2013年で同期とうかがいました。今はどのような仕事をされているのですか。

**高橋** 埼玉医科大学総合医療センター血液内科の助教を務めています。血液内科専門医として、日々患者さんに向き合い診療する毎日ですが、大学院からのテーマで研究も続けています。

**田中** 私も同じく助教として診療する一方で、2017年から社会人大学院生として、悪性リンパ腫領域の基礎研究に取り組んでいます。時間の確保に苦労しながら、臨床と研究の両立を図っています。

.....  
小児科医になりたいくて  
医師に 高橋

研究職を目指したが  
臨床に興味 田中

.....  
——医師になろうと考えたきっかけなどをお聞かせください。

**高橋** 父が小児科医で、子どもの頃から医師になろうと思っていました。ただ、父は私が物心つく前、2歳半のときに慢性骨髄性白血病（CML）で亡くなっています。それだけに医師を目指す気持ちが強くなったのだと思います。神奈川県出身ですが、父の実家が埼玉県だったこと、姉が城西大学に通っていたことから埼玉には馴染みがあり、2007年に埼玉医科大学に入学しました。

小児科医になりたいくて医学部に進んだのですが、5年生の小児科病棟での臨床実習で、小児科診療は自分が想像していたのとは少し違うこと、どうも自分

には合わないことに気がき悩みました。そして6年生の2カ月間の血液内科での臨床実習で、木崎昌弘先生にご指導いただき、「がんを薬で治す」「CMLが1つの薬で治る」ことを実際の診療で身をもって知り、素直に「すごいな」と思いました。そのことが、血液内科に強い興味を持ったきっかけです。

**田中** 私が医師になろうと思ったのは高校生のときです。それまではいわゆる研究職に就きたいと考えていたのですが、親戚から「研究するのなら医師の資格を持っていた方がいい」というアドバイスがあり、医学部を目指すことにしました。浪人時代は、実家の長野県を出て京都の予備校に通い、2007年に徳島大学に入学しました。

徳島大では1年間、自分が好きな研究室に配属となり、毎日午後はそこで学ぶというカリキュラムがあります。私は基礎系の研究室を選んだのですが、実験は好きだったものの理論が進まないという状況が続き、「どうも研究職は合わないな」と感じました。一方で、5～6年生のときの臨床実習が面白く、「臨床医になろう」「全



田中佑加氏

身を診る診療科に進もう」と決め、当初の思惑とは逆に卒業後は市中病院で臨床の腕を磨こうと決めました。

.....  
初期研修では臨床現場で  
精一杯働く 田中

卒業と同時に社会人大学院  
に入り研究 高橋

.....  
——大学卒業後、血液内科の医師になると決めたのは、どんな理由からでしょう。

**田中** 初期研修は、見学した中でもっとも研修医が生き生きと働いていた聖隷浜松病院（静岡県浜松市）で受けることにしました。各科をローテーションするのですが、1年目の2カ月間の救急科研修で大きなインパクトを受けました。年間の救急搬送が5,000台、救急外来が10,000人という現場は、特に夜間は野戦病院のようでした。そして救命はもちろんですが、その後の全身管理が重要であることを学びました。精一杯臨床現場で働き、忙しくも楽しい初期研修でした。

後期研修を受けるに当たって考えたのは、全身を診ながらも、総合性のみならず専門性を持ちたいということでした。2年間のローテーションで、それに合致するのは救急科、腎臓科、血液内科の3科と考えました。その3つの科が有名な施設で、かつ最初の1年間はローテーションも可能だったことから、2015年から埼玉医科大学総合医療センターで後期研修を受けることに決めました。そこで木崎先生と出会い、2016年から血液内科での勤務となりました。

**高橋** 初期研修は、埼玉医科大学で受けるか、地元の神奈川で受けるか悩みました。木崎先生に相談したところ、「研究マインド育成自由選択プ

ログラム」の提案がありました。これは、初期研修を受けながら、社会人大学院生となって研究も行うというコースで、研修の空き時間に合わせて、1年目は大学院の講義を受け、2年目は専門的な研究を行い、初期研修終了後は大学院生として2年間、研究中心の生活となりました。

研修では、血液内科をはじめ多くの診療科をローテーションしました。小児科で血液疾患の患児を主治医と一緒に担当したこともありました。一方、大学院では初めての研究生活となり戸惑うことも多く、昼は研修、夜は研究という日もありました。それでも4年間で「TOPKを標的とした多発性骨髄腫に対する新たな治療法確立を目指した基礎的解析」という論文を仕上げ、学位を取ることができました。

.....  
MMの合併症など  
長期管理も担当 高橋  
間口が広く専門性の  
高い診療が魅力 田中

.....  
——ここまで聞いたお二人の道のりは、対照的な印象を受けますね。その後、血液内科医としてどのように歩んできたのでしょうか。

**高橋** 初期研修の2年目からは、血液内科での研修が多くなりました。木崎先生から「研究だけやっていると行き詰まることもある」とアドバイスをいただき、臨床にも積極的に取り組みました。研究のためにいろいろ勉強をすると、臨床現場で考えることも増え、血液学、血液内科への興味がどんどん深まっていったと思



高橋康之氏

ます。その頃教えていただいた木崎先生の「Physician scientistたれ」という言葉は、以来ずっと胸に刻んでいます。

2017年からは助教として、臨床と研究を並行させています。博士論文の研究テーマだった多発性骨髄腫（MM）にウエートを置き、臨床では長期にわたるMM患者さんの管理・治療なども担当しています。患者さんの高齢化などで合併症も少なくありませんが、患者さんと1対1で向き合い、治療方針などを一緒に考えていくという関係性がいいなと思っています。

**田中** 血液内科が診る疾患は多く、かつ当院では血液の検査データに異常があれば、血液内科が受け入れ、若手が診るという仕組みになっています。例えば原因不明の汎血球減少の患者さんが紹介され、よく調べると全身性エリテマトーデスだったことがあります。一方で病名は分からなくても重症のこともあります。リンパ節腫脹と貧血という患者さんを診察したら、大腸がんの末期で全身に転移していたケースもあります。また、白血病として紹介された患者さんは既に重症であることも少なくありません。いずれも緊急の対応が求められます。

血液内科は、全身を診るという実臨床での奥深さに加え、腫瘍学の奥深さを併せ持っています。先は見通しにくいけれど、専門性の高いところが魅力です。

臨床家の目で研究、  
研究者の目で臨床 高橋

臨床での知見を深める  
研究を進めたい 田中

——これから、どんな血液内科医になりたいと考えていますか。

高橋 血液内科の患者さんには、一

つとして同じ病態はありません。どの薬を使うかなど治療方針は、主治医だけでなく患者さんと一緒に考え、決めることが意義あることだと思います。血液疾患で使う薬は最先端のものばかりと思い込んでいましたが、米国家がん学会 (AACR) に参加したときに、どのがん種も同じように先端を走っていることを実感し、これは頑張らなくてはいけないと思いました。臨床家の目で研究し、研究者の目で臨床に取り組んでいきたいと考えています。

田中 今は社会人大学院生として、

昼は臨床、夜は研究という生活になっています。卒業後はずっと臨床現場におり、研究の基本が分からず、実験手法などを教わる必要がありました。ただ、本格的に研究を進めるにつれ、研究で偉大な成果を挙げるには特異な才能も持ち合わせている必要があるのではないかと考えるようになりました。ですから私は、まずは臨床での知見を深めるための研究を進め、そこで得られた成果を患者さんに還元できるよう努力したいと思っています。

——ありがとうございました。